

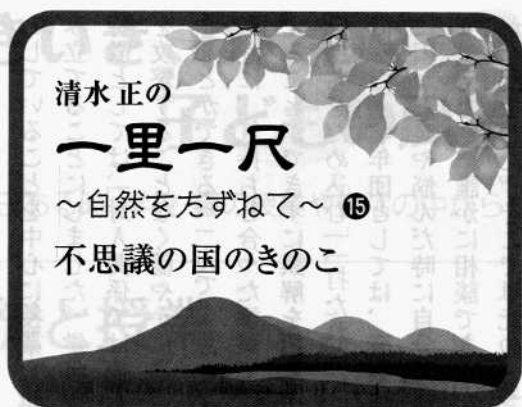
嵯峨の奥に広がる自然

清水 正の

一里一尺

～自然をたずねて～ ⑮

不思議の国のきのこ



今年の梅雨入りは早く、六月の初旬にはすでに梅雨入り宣言が出た後でしたが、幸い曇り空という中、観覧会の下見で嵯峨観空寺谷の林道に行きました。大覚寺周辺は民家や寺院の建物がありますが、

有栖川を越えたあたりからまばらとなり里の風景が広がります。林道の入口あたりに竹林があり、この時季キヌガサタケが見られるのではと目を凝らしましたが発見できませんでした。途中の分岐の坂を下ると忽然と広場のような所に出くわします。ここは有栖川に造られた砂防堰堤の上部にあたり、砂が堆積したために川の底が上がり平たくなったものかと思われま

す。ということもあって少し湿性を帯びたり、幾筋かの小さな流れが出来ていてタデの仲間が繁茂したり、大きなアカメヤナギ（マルバヤナギ）などが生育しています。昨年はこの木の洞にニホンミツバチが巣を作っていたのですが見当たりません。振り返るとモリアオガエルの白い泡で包まれた卵塊が三個ほどぶら下がっています。その下には気の早いアカハライモリがオタマジャクシを食べようと集まっています。卵塊一個には三〇〇から八〇〇の卵が入っていると

いわれ、そのほとんどがイモリなどの天敵に食われるようで、俗に「四〇〇分の一の命」とも言われています。親ガエルは産卵が終わると森に帰り樹上で生活を続けます。カエルは幼生の段階では水の中で暮らし、成体になれば山の中で生活する。まさしく両生類なのですね。

ゼキシヨウと呼ばれるもののようです。これは初見です。ニワゼキシヨウに始まりずいぶん色々なニワゼキシヨウ仲間が広がっているようです。まだまだ新しいニワゼキシヨウが増えていくのでしょうか。色々な物が増え美しくはあるものの、所詮日本にあったものではなく持ち込まれ、本来の生物多様性とは違い、複雑な気持ちです。

きのこの季節到来！

この道を奥に行くとなかなか興味深い植物があるのですが、この時期はきのこの季節でもあります。世間一般では、きのこは秋という常識の様ながありますが、梅雨から夏にかけては秋にも負けないきのこの発生が多い時季です。矢張り幾つかのきのこが見つかりました。はじめに目に入ったのが

枯れたカエデの木になるアラゲキクラゲでした。同じ木にヤナギマツタケも生えていました。もう少し探したら次から次と見つかりました。どちらも特徴がありすぐに種名が判明しました。しかも食用菌です。市販で乾燥キクラゲとして出回っているものの多くはこれです。名前の通り傘の裏に毛があり、白っぽく見えます。別にキクラゲと言うものもあり、これは俗に本キクラゲともいうものです。こちらの肉質はゼラチン状で少し分厚く透明感があり、耳たぶを触ったときのようなぶるぶる感があり絶品です。ヤナギマツタケは公園や並木のプラタナスにもよく発生します。勿論名前の通りヤナギにも発生します。どちらも枯れ木などに生える腐生菌と言われるもので、枯れ枝や枯れ葉を分解し

て土に返してくれます。森にはなくてはならない生物です。この性質を生かして栽培が可能になり、両方とも養殖栽培がされて街のスーパーでも見受けられます。

ヤナギマツタケの特徴を少し記しておきましょう。傘の色は幼菌の時は赤味を帯びたベージュ色ですが成菌になると白っぽくなります。表面は少ししわがあります。傘の裏は幼菌時には膜が張っていますが、傘が広がるとともにめくられてつばになり、スカートのように垂れ下がります。ひだの色も灰白色から、胞子が形成される頃になると褐色に変わっていきます。柄には繊維状の模様があり、匂いはマツタケのような香りを発します。かなりわかりやすいきのこです。当然のことながらアラゲキクラゲもヤナギマツタケも採取して、

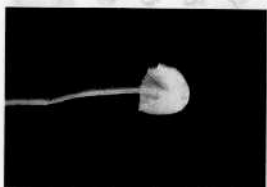
その日の夕食に並びました。

森の小人がティータイム

もう少し足を進めると小さい傘と極細の柄、いづれも透き通るような白色のきのこが枯れ枝についていました。ホウライタケの仲間



ホウライタケの仲間



ホウライタケの仲間

小人が使うコーヒークップと言ってもいいようなきのこがありました。このキノコの幼菌時はコーヒークップの上に蓋がついて、まるでロシア料理の壺焼きといった感じです。成菌になるとこの蓋が外れ中に碁石のような小さい粒が出てきます。小さい粒は小塊粒と呼ばれる胞子の塊です。

この小塊粒の色やカップの内側や外側の模様や毛の付き方などで見分けが出来ます。私の持つきのこ図鑑では



クロノポリリュウタケ



ツネノチャダイゴケ

四つのチャダイゴケが載っているのですがツネノチャダイゴケに類似しています。この日に見られなかったキヌガサタケは、後日府立植物園のタケの見本園に行つて見ることが出来ました。まさにきのこの女王にふさわしい美しい姿でした。このきのこの形も前出のものに劣らず変わった形をしています。たった五つのきのこを紹介しましたが、実に多様で複雑な形をしています。恐らく多くの人はきのこのことといえばマツタケやシイタケを連想して、ここで話したものを

きのことは思わなしかもしれませんね。

きのこのワンダーランド

これはきのこのについての、ほんの入口に過ぎないのです。「日本には、四〇〇〇から五〇〇〇種類のきのこが存在していると言われていますが、正確な数はわかっていません。このうち食用とされているきのこは約一〇〇種類、一方、毒きのこは約四〇種類が知られています。その他の大半のきのこについては、食毒が不明となっています」(林野庁HP)

その中で名前が付いているものは約二〇〇〇種と言われています。未知のものはその二〜三倍あるとされています。図鑑に載っているものに至っては数百程度、私の持つ図鑑はハンディとしては一一五

五種と格段に多い(持ち運べない図鑑を越える種数)といっても、とてもフィールドで見かける多さには追いつかない。専門家さえ「これは何々の仲間かな」と言う事がよくある世界。だからこそ楽しいし、自由な世界です。何も種類分けが全てではなく、きのこについてはその色の多さ、形の面白さ、生きざまの不思議さなどのきのこワンダーランドに遊ぶことが出来ます。

季節ごとにキノコの種類も変わる、夏のきのこ

ではもう少しきのこワンダーランドでファンタジーな世界に浸ってみましょう。キノコも季節によつて発生するものが違います。夏はイグチ、ベニタケ、テングタケといった中々大型のものがよく

見かけます。

イグチは

一般によく

知られるき

のことは少

し違うところ

があります。

傘の裏

がスポンジ状でひだがありません。

きのこを見かけたら必ず裏を見る

ようにしましょう。そのために小

さな手鏡があると便利です。この

きのこは触ると色が変わるものが

多いのも特徴です。触ったらすぐ

に青く変わってビックリしたとい

うことがあります。これを青変性

といいます。昔はイグチはすべて

食べられると言ったそうですが、

今は毒のものもあるので、一つ一

つ確認しなければなりません。六

月初旬に宝ヶ池できれいなアカヤ



コウジタケ(イグチ)

マドリに会いしました。これは大型のきのこで成菌を上から見るとチーズケーキのような色具合でひびが入っています。柄は太く堅実。一個あれば何人かで食べられます。でも柄に虫が入り外目とは違い食するには不適當でした。そのとなりには何とおとぎ話に出てくるようなずんぐりむつくりの幼菌が二本ありました。

キヌガサタケを見に行った府立植物園ではベニタケの仲間がたくさん生えていました。大型のカワリハツ(傘の色に淡青緑色、紫緑、褐青・暗紫紅色と変化がある)や



キヌガサタケ



カワリハツ



テングタケの仲間の幼菌



キララタケ

シロハツの仲間、クサハツ(臭い匂い)、ニオイコベニタケ(小型で紅色、カプトムシ臭)等が見られました。ベニタケグループの大きな特徴は柄が寸胴で、全体が砕けるように割れる。ものによっては傷つくと乳液を出す)

テングタケのグループは夏も盛りになるとあちこちで見られ、きのこの全ての部品が付いています。部品とはツボ(柄の底に膨らみがありカバーが付いている)とツバ(柄の途中に刀の鐔様のもの)があ

ります。一般に知られるテングタケです。この仲間は毒成分を持つものが多く知られているので要注意です。しかし姿が美しくカラフルなものが見られ「Theきのこ」といった感じですが、また卵のようなものが割れて、むくむくと背を伸ばして、きのこになるのの特徴の一つと言えます。この時、殻を傘につけたまま残るというものもあります。この号が届く頃あちこちでテングタケ類が見られるでしょう。